

## この夏



スウェーデン・ティンメナッペン在住

藤倉・カールソン・篤子

今年は6月の夏至祭の頃に中南部スウェーデンの夏はあっけなく終わってしまいました。7-8月は日本の梅雨のようなジメジメした雨続きで8月後半に学校が始まると突然「秋」の空気がストンと降りてきました。

昨年まで二年連続暑い夏が続き、毒性プランクトンの大発生が災いして海で涼めなかったので自宅の庭にマイ風呂やマイプールを日曜大工で作るというのも今年は流行りました。庭風呂は深さ90cm、直径2m位の木製の円形樽で、日本の昔を思い出させてくれるような薪で焚く風呂で肩まで温まれます。日本の露天風呂と違うのは水着をつけて入ることです。温泉のないこの国では露天風呂というよりは温水プール感覚なのでしょうか。

太陽や海とは無縁の夏には後で考えるとなかなか乙な一面もありました。今年ほど疎遠になっていた旧友が訪ねてきたり、親戚や友人たちと訪ねあったことも珍しいからです。

義父母は海辺に近い我が家で毎年夏は一週間程海に入ったり、日向ぼっこを楽しみます。しかし、今年は滞在中も5年前義父が引退するまで親交のあった同僚や50年以上前に兵役中に同室だった友人を捜して訪ねたり、ガラス王国まで足を伸ばして安いガラスを買い付けに行ったり…といつもとは戦

略を変更して少し違う色あいのバカンスを楽しんでいたようです。

友人ロスヴィタとは20年も前に初級スウェーデン語を習った頃からずっと親しくしています。その彼女が同じクラスメートだったセヨムに連絡をとり、15年ぶりの再会をプレゼントしてくれました。ロスヴィタはご主人の都合でスウェーデンに引っ越してくる以前はドイツで看護師だったのですが、その5年後に帰国して現在は南部ドイツのスウェーデン系列会社で語学力を生かし事務の仕事をしています。当時小さく可愛かった娘のアンニカは今はイタリアで語学を勉強中、5カ国語を話す別嬪さんに成長しました。「めんこいねえ！」と私がよく言ったのを覚えていて、それも入ると6カ国語と笑っていました。そしてセヨムとは本当に久しぶりです。彼は似顔絵や風景スケッチをするのがすごく上手だったけれど本来はモスクワ大学を出たエチオピアの建築家で、中古の家を購入したばかりの私たちに改築用の設計図を描いてくれました。スウェーデンでは建築家としてはチャンスの前髪を掴めず、10年後に建築への思いをやっと断ち切って今はストックホルムで小さなキオスクを経営しています。色々あったよねえ…と、同じ時代に同じ何かと戦ったかような心地よい連帯感に温かい元気をもらったような気持ちでした。



15年ぶりの同窓会



庭で焚く人気の露天風呂



授乳中の森のバンビ



ユーランド島、世界遺産の真っ只中を行く

そしてこの夏はもう一人、大切な友人が猛暑の日本から会いに来てくれました。私にとっては定番になっているガラス王国、カルマル城、ユーランド島の世界遺産などを一緒に巡りながら、彼女が扇風機さえもいらぬ今年のスウェーデンの涼しさの中で深呼吸をし、ハリネズミやバンビ（ノロジカ）が出没する森や殺伐として何もない広大な16世紀の農耕地の景観を心から独り占めにして楽しんでいる姿をみて、住んでいるとあたりまえで見えなくなっている大切なものを彼女に見せてもらった気がしました。